
微熱以上、高熱未満

暁月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微熱以上、高熱未満

【Nコード】

N9479E

【作者名】

暁月

【あらすじ】

ある日突発的な事件が起こってしまう。でも、お陰で二人の関係は一気に進展を見せ……。る？ 某私設HPにて綴った作品の貼り替え。CPはコ哀。苦手な方はBACK推奨――

（前書き）

あらずじにも記載してあるようにCPは「哀」です。受け入れられない方はBACKしてください。

工藤邸の書庫には世界中の様々な分野の書物が溢れている。その事もあって、哀はコナンに付き合って工藤邸を訪れた。

けれどそれは建前で、本当はコナンと一緒に過ごしたかっただけの話だ。

そんな想いを押し隠して、哀は隣でコナン「ドイルの初版本を読み耽る推理オタクの横顔を見つめた。

ほんの些細な、それでも哀にとっては密かな幸せの時間だった。

）
微熱以上、高熱未満
）

「ねえ、今度はあの本が読みたいんだけど。届かないから取ってくれる？」

「はあ？ 脚立があんだろ？ 自分で取れよ」

「あら。工藤君て優しくないのね。頼んだわたしがバカだったわ」

「わあったよ。取りや良いんだろ、取りや。……ったく。ちよつと待ってろ」

不平を漏らしながらも読んでいた本を伏せ、リクエストされた本に手を伸ばすコナン。

けれど手が届かず、結局は脚立に足を掛けた。

その様子を哀は、口許に微かな笑みを浮かべて眺めていた。

刹那――。

「うわ――っ！」

「く、工藤君!？」

脚立の上でバランスを崩したコナンは、そのまま床に落ちそうになった。

それを哀が受け止めようとして駆け寄る。

「きゃあ――っ」

哀としては踏ん張ったつもりだった。けれどその甲斐も無く、押し潰されてしまう。

仰向けに倒れ込んだ哀の上にコナンが覆いかぶさる形だったが、ここで一つの事件が発生していた。

床に打ち付けた後頭部の痛みに顔をしかめつつ、哀は唇に違和感を覚えて目を開く。

そして状況把握に掛けることしばらく。目に映った現実に顔を紅潮させた。

「ちよっ……な、何するのよ！ エッチ！」

コナンを払いのけた哀は、上体を起こして背中を向けた。

恥ずかしくて、まともに顔を合わすことが出来ない。
意識すればその分鼓動が高まって、軽い眩暈さえ覚える。

「わりい灰原……悪気は無かったんだぜ？　まさか、こんなことになっちまうなんて――」

「どうだか。本当は狙ってたんじゃないの？　事故にしては的確に重なったもの。……その、あなたとわたしのくち……」

消え入るように小さな声で応え、哀は振り向いてコナンを弱く睨んだ。

指先を軽く唇に触れて、さっきの余韻に戸惑っているかのように。哀に睨まれたコナンは肩を竦め、嘆息について哀を見返す。

「……嫌、だったか？　でも本当にわざとじゃねーから。今更かも知んねーけど」

「ごめんなさい、言い過ぎたわ。びっくりしただけだから……もう気にしないで」

そうは言っても決まり悪さは残る。意識するほど場の空気は緊張してゆく。

俯いて床に視線を走らせる哀と、哀を見据えて立ち尽くすコナン。無言のまま張り詰めてゆく想い。耐え兼ねたコナンが本音を零す。

「オメーには悪いけど、オレは正直嬉しかった。形はどうあれ、オ

「メーとキス出来たんだしな」

「……………」

「迷惑かも知んねー。けど…………オレは灰原、オメーのこと、好きだから」

不意打ちだった。哀が、息を呑んでコナンに顔を向ける。目を大きく見開いて、信じられないとその瞳で訴える。そして震える唇を強引に開き、想いを打ち明けた。

「バカね。嫌なんて言っていないじゃない。さっきも言ったけど、びつくりしただけよ。…………喜んでる自分にね」

「はい…………ばら？」

「わたしも工藤君のことは好きだから。恥ずかしかったのよ」

はにかんだ哀が、そう言ってコナンを真っ直ぐ見つめる。潤みを帯びた濃灰色の瞳がコナンをドキリとさせた。

「でも、あなたの気持ちに応える資格は、わたしには無いのよ」

「…………何だよ？　もしかして、まだこだわってんのか？」

「当然でしょ。わたしは罪人。…………あなたの想いを受け止めること

は出来ないの。微熱にまどろんでも高熱に魘^{おそ}れる訳にはいかないのよ」

風邪の症状を例えに上げる哀を、コナンは困惑顔で見つめ返す。
そんなコナンから視線を外し、哀は飄々と言葉を繋げた。

「それに、もし元の姿に戻ることが出来たら……あなたは彼女の許に帰ってしまうんでしょ？ そんな人の勘違いな気持ちには応えられないわ」

「な……！ オメーはオレがそんないい加減な奴だったのか？ そんな目で見てんのかよ！？」

「あら、否定出来る？ 今は小学生の身体だから、身近なわたしを好きなんだって誤解してるだけかも知れないじゃない。けれど元の身体に戻ったら、どう？ それでもわたしのことを好きでいられるかしら」

厳しい詰問を受けたコナンが言葉を詰まらせる。

答えは決まっている。ただ、どう伝えるべきか迷ってなかなか口を開くことが出来ない。

ほらね、と溜め息をついて結論を急いぐ哀。

「もうこの話は止しましょ？ 不確かな未来を言い争っても不毛だわ。今まで通り、わたしとあなたは同じ運命を背負った同志。それ以上でも以下でもない。……それがベストなんじゃないかしら」

一気にまくし立てると、哀は立ち上がって書庫を後にした。コナ
ンはその背中を目線で追い、唇を嚙んだ。

哀は阿笠邸に戻ると、直ぐさま自室に籠った。机に飾った姉の写
真を手に取り、そつと話し掛ける。

「素直じゃないのは判ってるわ。けど仕方ないものね。彼の光は、
わたしには眩し過ぎるから」

淋しげな笑みを浮かべ、コナンが触れた唇を指先でなぞる。

哀はときめきを隠せず、しばらく物思いに耽った。

一方コナンは、書庫で考えていた。どうすれば哀に分かってもら
えるのか、その一点だけを遮に無に。

そして哀の唇の感触を刻み込むように目をつぶり、意を決して駆
け出した。

「……灰原、ちょっと良いか？ 話がしてーんだけど」

「何よ。あの件ならもう済んだはずよ？　また蒸し返すつもりなの？」

「とにかく開けてくんねーかな。頼むから……」

阿笠邸に戻ってしばらく。案の定訪れたコナンを、哀は拒もうと思えば出来た。

けれど内心疲れていた。これを機に素直になれば、そう考えて扉を開けた。

「お願いがあるの。それを約束してもらえなら考えを改めるわ」

「言ってみろよ。とりあえず、聞いてやつから」

穏やかな笑顔で見つめられ、哀はハッと視線を逸らした。

コナンが手を伸ばして、強制的に前を向かせる。

「バアロ。オレも恥ずかしんだ。自分だけ逃げてんじゃねーよ」

「分かったわ。一回しか言わないから、ちゃんと聞いてちょうだい」

「……ああ、聞いてやろうじゃねーか。だから、早く言えて。じゃねーと……」

「じゃねーと、どうなるって言うのよ。そんな脅しには——」

途中で奪われた哀の言葉は、そのまま飲み込まれた。正確には声を出せる状況ではなくなっていた。

コナンに塞がれた唇が微かに震える。全ての意識はそこに集中してゆく。

時間にして僅か二、三秒。けれど哀の中では一時間にも等しい長さを感じた。

やっと自由になった時には安心していった。

とろんとした瞳で、哀はコナンを見つめる。小学生の小さな身体に似合わない陶醉顔が、いやになまめかしい。

コナンがいたずらっぽく口端を引き上げて哀を見つめ返す。

「まだ言えねーか？ だったらもう一度——」

「調子にのらないで、バカ。オオカミさんにはお帰り願おうかしら」

放心状態から戻った哀が、紅潮した頬を隠してコナンを睨みつける。

悪びれもせずにコナンが笑うと、哀も釣られてクスツと零した。

「狡いわよ？ 不意打ちで唇を奪うなんて、小学生のすることじゃないわ」

「仕方ねーだろ？ したかったんだから。けど、やーらけーんだな……オメーの——」

今度はコナンの言葉尻が掻き消される。その原因は哀がコナンに反撃したからで。

「無理矢理される側の気持ち少しは解った？　これに懲りたらもう——って、解ってないみたいね。呆れるわね」

身体は小学生でも精神は完全に高校生な二人。抑えることの出来ない衝動はまるで尽きない。

かと言って、突き進む訳にもいかない。理性で辛うじてブレーキを掛ける。

「ダメよ工藤君。わたし達は——」

「わあってるって。そこまではしねーよ。オメーのことは大切だし、な。『お願い』って、そういうことなんだろう？」

そう問うたコナンに、哀はそつと頷いた。そして微笑みを贈る。言わなくても想いが伝わったことが、何よりも嬉しい。

やっぱり好きになって良かった、と掛け値なしに思った。

「わたし達はまだ子供だもの……。微熱以上、高熱未満の関係でいなくちゃ。でも、いつかその時がきたら——」

「ああ、そんな時は遠慮しねーかな。覚悟しとけよ？」

言葉の意味と裏腹な爽やかな笑みに、哀が堪らず吹き出す。

このおバカさんなら信じられると確信出来るからこそ、天使の微笑も溢れて。

けれど少しの不安も無い訳ではない。まだまだ何年も先に、果たしてその時が訪れるかは解らないから。

「でもきつと大丈夫ね。それに、もう失うのは嫌なもの」

コナンに聞こえないように呟き、口許を緩めた。

哀の顔から迷いは全て消えていて、そんな哀の髪をコナンが撫で上げる。

——十年の後にも忌まわの際にも、同じ想いでいようと誓って。
微熱以上、高熱未満。いつかは高熱に魔れる日が来ることを願って。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9479e/>

微熱以上、高熱未満

2010年10月21日02時08分発行